

【論文】

TOEIC® L&R テストパート7における 設問文の難易度を考慮した解答方法が スコアに与える影響に関する調査

A Study on the Effect of Answering Methods Considering the Difficulty
of Question Sentences in TOEIC® L&R Test Part 7

藤 森 吉 之
FUJIMORI Yoshiyuki

目次

要旨

1. 本研究の背景

- 1-1. 平均的大学生受験者にとってのテストの難易度
- 1-2. 平均的大学生受験者にとってのテストの問題量
- 1-3. 平均的大学生受験者にとって完答が困難な理由
 - 1-3-1. 不適當な時間配分
 - 1-3-2. 不十分な読解速度
- 1-4. 調査の目的

2. 方法

- 2-1. 被験者
- 2-2. データ収集の方法
- 2-3. 設問文の仕分け
- 2-4. データに基づく表の作成

3. 結果

- 3-1. 被験者の読解速度測定結果
- 3-2. 被験者が問題番号順に解答した際の結果
- 3-3. 「易しめの設問文」と分類した問題から解答を行った場合という仮定に基づく計算

4. 考察

おわりに

要旨

本調査の主目的は、TOEIC® L&R テストのリーディングセクションを制限時間内に解き終えることが難しい受験者がパート7に解答する際、問題番号順でなく設問文の難易度が低い問題から解答していく方法を選択した場合、正答数にどの程度変化が生じるかを調べることであった。設問文の難易度による分類は、中村・山科（2021, 99）を参考に行った。2名の大学生に過去に出題されたリーディングセクションの問題を番号順に解いてもらい、彼らの正答数を、難易度の低い問題から解答していたらという仮定のもとに算出した正答数と比較する方法で調査を行った。すると、「易しめの設問文」と分類された問題を優先的に解答した場合、問題番号順での解答方法と比較して正答数に大きな変化はみられないであろうという結果が得られた。正答数が微増にとどまった理由としては、難易度が低い問題における正答率と難易度が高い問題における正答率の差が、両被験者共に10%台と大きくなかったことが考えられる。また、今回の調査方法が易しめの問題から優先的に解答することにより生じる時間的余裕や、この時間的余裕がもたらすだろう解答の質的向上や未解答問題数の減少等は考慮していない計算結果であることも影響したと思われる。

1. 本研究の背景

1-1. 平均的大学生受験者にとっての TOEIC® L&R テストの難易度

TOEIC® L&R テストは英語力が高い者から低い者までが受験する試験として知られている。このテストはリスニングセクションとリーディングセクションで構成されており、受験者は試験時間が45分間のリスニングセクションでパート1～4の100問の問題に、試験時間が75分間のリーディングセクションではパート5～7の100問の問題に多肢選択方式で解答する。問題の難易度による配点の高低はなく、素点に基づいて統計的に処理された得点がスコアとして表示されるようになっている。また、実用英語技能検定（通称英検）と異なり、受験者の英語レベルに近い問題で構成される級別に作成されたテストではなく、同一問題で英語コミュニケーション能力を測定するテストとなっている。そのため、英語習熟度が高くない受験者にとっては難易度が高く感じられるテストとなっている。多くの大学生にとってもこのテストの難易度は高いと考えられる。このように判断する根拠を4つのデータを使いながら示していく。

1つ目のデータは、国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）によって公開されている「TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2023」である。これによると、大学生のIPテスト（団体受験テスト）における平均点は、990点満点中の474点（内訳は、リスニングセクションが266点、リーディングセクションが209点）となっている（IIBC, 2023a, p.8）。平均的な大学生はTOEIC® L&R テストにおいておおよそ半分の得点しか取れないことから、大学生にとってこのテストの難易度が高いことがわかる。

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

2つ目のデータは IIBC (2023b) の「レベル別評価の一覧表」である。これにはリスニングセクションとリーディングセクションの平均値に基づいた評価が記述されている。上記で示した得点（リスニングセクションが266点、リーディングセクションが209点）の受験者に対する弱点は以下のように示されている。

リスニングセクションのスコアが5～270点

一般的に以下の弱点が認められます。

- 短い会話において、表現が直接的で、予想外の情報が提示されることがなくても、話の主旨、目的、基本的な文脈が理解できない。
- 長い聴解文において、広い範囲にわたって情報を関連付ける必要があるとき、もしくはやや難しい語彙が使用されるときは、話の主旨、目的、基本的な文脈が理解できない。
- 短い会話において、やや難しい語彙が使用されるとき、もしくは構文が複雑なときは、話の詳細が理解できない。否定構文が使用されるときは、詳細が理解できない。
- 長い聴解文において、解答に必要な情報が話の途中で提示されたときは、話の詳細が理解できない。言い換えられた情報や難しい文法的な構造が理解できない。

リーディングセクションのスコアが5～220点

一般的に以下の弱点が認められます。

- 文章中の情報について、推測ができない。
- 事実に基づく情報の、言い換えが理解できない。解答するとき、問題に使用されているのと同じ単語や句を文章の中から探すことに頼る。
- 一つの文中の情報さえ、関連付けることができないことが多い。
- 限られた語彙しか理解できない。
- 文法以外に難しい言語的要素（難しい語彙が使用されている、情報を関連付ける必要がある）がある場合は、簡単な文法構造も理解できない。

これらの記述からも、こうした弱点を持つ受験者のスコアレンジに含まれるだろう多くの大学生にとって、TOEIC® L&R テストの難易度は高いという判断が可能であると思われる。

3つ目のデータは文部科学省が公開している「各試験団体のデータによる CEFR との対照表 (2015/09/29 版)」である。まず、前述した大学生の平均点をこの表と紐付けてみる。474点という大学生の TOEIC® L&R テストのスコアは、この対照表の225点～545点の範囲に含まれ、CEFR レベルでは A2 レベルに区分される。この表には英検の級も記載されているが、CEFR の A2 レベルは英検準2級と同等のレベルとして示されており、英検準2級で出題される問題を比較対象にした場合、TOEIC® L&R テストに登場する語句のレベルや文書内容の複雑さなど、程度の差は明らかである。それゆえ、このデータを基にしても、平均的スコアを持つ大学生にとって、TOEIC® L&R テストの難易度は高いと判断することができる。

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

4つ目のデータは、「TOEIC® Program 各テストと CEFR との対照表」である (IIBC, 2008)。このデータは TOEIC® L&R テストのみならず、試験時間が 60 分と短く難易度も相対的に低く設定された TOEIC Bridge® テスト、さらに発信技能に焦点を当てた TOEIC® S&W テストなども含んだ対照表となっている。3つ目のデータとの相違点は、TOEIC® L&R テストのリスニングセクションとリーディングセクションを分けた表記となっている点である。本調査ではリーディングセクションに焦点を当てているため、ここでは TOEIC® L&R テストのリーディングセクションについてのみ記させてもらう。すでに示した通り大学生のリーディングセクションでの平均点が 209 点であり、この点数は 115 点から 270 点までのスコア範囲に入っている。CEFR レベルでは A2 の Basic User と区分されることになる。Basic User という言葉が意味するように、リーディングセクション単体での難易度についても、平均的大学生にとっては高いと判断することが可能であると思われる。

1-2. 平均的大学生受験者にとっての TOEIC® L&R テストの問題量

TOEIC® L&R テストはリスニングセクションとリーディングセクションの 2 部で構成されているが、ここでは後者のみについて記述していく。リーディングセクションの時間の使い方 (時間配分) は受験者がそれぞれに決めることになる。英語習熟度レベルが高くない受験者や英語を読むスピードが遅い受験者にとって、75 分間の制限時間内にすべての設問に解答することは難しいセクションである。Trew (2007) もこのテストの時間管理に関する部分で、制限時間内で完答することの困難さについて以下のように記述している。

The tight timings of the TOEIC test are one of the most challenging factors for many learners. In the Reading Section, students not accustomed to dealing with long texts in a short time often have difficulty completing all the questions. (p.6)

また、加藤 (2019) もリーディングセクションにおいて多くの受験者が完答できないことを示唆している。そして、このセクションでの得点 (495 点満点中) を目安として、制限時間内に解き終わらない問題数について以下のように書いている。

495 ~ 400 点 : 音読に近いスピードで英文が読め、ほぼ時間内に完答可能

400 ~ 300 点 : 10 ~ 20 問程度が制限時間内に解き終わらない

300 ~ 200 点 : 20 ~ 30 問程度が制限時間内に解き終わらない

200 ~ 100 点 : 30 ~ 40 問程度が制限時間内に解き終わらない

すでに述べたように、IP テストにおける大学生のリーディングセクションでの平均スコアが 209 点ということなので、加藤の記述に基づけば、平均的スコアを持つ大学生は 20 ~ 30 問程度残した時点で試験終了時刻を迎えていると推察できる。

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

筆者も以前、「公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 4」を教科書として使用した TOEIC® L&R テスト対策クラスで、テスト1のリーディングセクションを大学生43名に解かせたことがあるが、そのうちの5名はリーディングセクションの最後の問題から数えて、それぞれ14問、20問、22問、25問、30問をマークしないまま答案を提出してきた。さらに、テスト後の聞き取り調査において、75分という制限時間の終了間際に当て推量でマークして解答した者が33名も存在していることも判明した。つまり、制限時間内にすべての問題に目を通して解答できた被験者は、43名中5名のみということである。そのときの調査においても、TOEIC® L&R テストは、筆者が指導する多くの大学生にとって完答することが困難なテストであることを示していた。

平均的な大学生にとっての TOEIC® L&R テストの難易度についてはすでに触れたが、その時の被験者にとって「公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 4」のテスト1がどの程度難しかったのかを示すために平均点と標準偏差を記述しておく。被験者43名のリーディングセクションにおける素点平均は約43.4/100点であり、標準偏差は約9.6であった。この平均点を IIBC 発行の「公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 4」の参考スコア範囲算出表と照合すると、彼らのリーディングセクションのスコアは125～205点となる。この数値は2022年度のIPテストを受験した大学生の平均スコア209点を下回っていた。それゆえ、当時の被験者にとっては問題の難易度が一層高く感じられたことが推察される。

1-3. 平均的大学生受験者にとって完答が困難な理由

リーディングセクションで制限時間内にすべての問題に目を通すことのできない原因には、問題の難易度が高いことや読むべき英文の量が多いことなども挙げられるが、早川(2010, p.116)はリーディングセクションを構成する3つのパート(Part 5, Part 6, Part 7)のうち、最初の2つのパートに時間を多く使ってしまう可能性と最後のパートを読む速度が遅いことを原因として挙げている。

1-3-1. 不適當な時間配分

パート5とパート6に出題される問題は、文法や語彙の知識の有無が正解と不正解を分けるポイントとなることが多い。それゆえ、時間を多く配分しても正答率が上がる可能性は低い。しかし、このことに気づいていない場合、時間をかけたとしても正答率が上がりにくい知識の有無を問うパート5とパート6の問題に多くの時間を割きすぎてしまう可能性がある。これら2つのパートは英語の知識量に自信が持てない受験者であればあるほど解答作業に多くの時間をかけないようにすることが望ましいパートであると言える。一方、パート7には、文書中に出現した単語の同義語を選択するような、知識を問う問題も一部出題されるものの、時間を多く配分してじっくりと内容を理解するよう文書を読むことで正解に至る可能性が高まる問題が多く出題されるという特徴がある。同じリーディングセクションとはいえ、それぞれのパートはこのように性質が異なる問題で構成されていることを認識した上で時間配分をどうすべきか考えることが重要である。

受験者が時間配分を決める際、TOEIC® L&R テスト対策の書籍やウェブサイトで紹介

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

されているリーディングセクションの時間配分に関する記述を参考にすることが少なくないだろう。ここで、このテスト対策に精通している指導者たちの考えをいくつかを抽出し表1として示す。

(表1) TOEIC® L&R テストリーディングセクションの解答時間配分

	著者	出版年	ページ	Part 5	Part 6	Part 7	見直し	目標スコア	備考
①	星名	2023 0901 閲覧	Gariben ウェブ ページ	15分	15分	45分	—	600点	・「問175までをゴールに」との記述あり：(つまり問147～問200までであるパート7全54問中、最後の25問(問176～問200)は考えて解答することをあきらめて、問175までに集中することを推奨している。)
②	星名	2023 0901 閲覧	Gariben ウェブ ページ	12分	10分	53分	—	700点	・「問185までをゴールに」との記述あり：(つまり問147～問200までであるパート7全54問中、最後の15問(問186～問200)は考えて解答することをあきらめて、問185までに集中することを推奨している。)
③	星名	2023 0901 閲覧	Gariben ウェブ ページ	10分	10分	55分	—	800点	・「問185～190までをゴールに」との記述あり：(つまり問147～問200までであるパート7全54問中、最後の10～15問は考えて解答することをあきらめて、問185～問190までに集中することを推奨している。)
④	田邊	2023 0901 閲覧	トイグル ウェブ ページ	20分		55分	—	—	・「シングルパッセージに25分、ダブルパッセージとトリプルパッセージに30分」との記述あり
⑤	濱崎	2016	p.188, p.232, p.264	約10分	約10分	約55分	—	—	表紙に「スラスラ学べて600点がとれる!」との記述あり
⑥	TTT 模試 作成プロ ジェクト [編]	2022	pp.14～ 15	10分 以内	10分 以内	55分	—	—	—
⑦	中村・ 山科	2021	pp.56～ 57	*10～ 15分	10分 以内	50～ 55分	—	600点	・「600点をを目指す人は(Part 6で)まず10問正解を目指しましょう。」／「600点をを目指す人は(Part 7で)まず32問正解を目指しましょう」との記述あり *Part 5については記述なしのため、筆者が75分からPart 5・6の時間を引いた計算した数値
⑧	白井	2017	p.124	10分	5分 程度	54分	—	600点	「…600点突破を目指す初級者はもちろん、さらなるスコアアップをめざすみなさまのお役にたてるように…」との記述あり
⑨	ETS	2022	p.12	10分	8分	54分	3分	—	—

目標スコアについての言及があるかどうかや、解答を終えた後の見直しにかかる時間を含んでいるかどうかなどで、推奨される時間配分は異なっているが、パート5とパート6に割り当てる時間は合計で20分程度を推奨している場合が多い。パート5は30問の短文穴埋め問題で、パート6は16問の長文穴埋め問題で構成されている。それぞれのパートを推奨されることの多い10分で終わらせるためには、パート5は1問あたり20秒、パート6は1問あたり30秒で解くことが求められることになる。ただ、上記①で示したように、

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

600点を目指す場合にはパート5とパート6にそれぞれ5分ずつを上乗せし、15分を当てることを推奨している星名のような指導者も存在している。このように、TOEIC テストの指導者たちの間でも、パート5やパート6へ配分するべき時間についての見解が一致していない。

また、パート7に視点を移すと、このパートでは55分を割り当てることが推奨されていることが多いことがわかる。リーディングセクション全体での試験時間が75分で問題数が54問であるので、計算上1問あたり約1分で問題を解くことが求められることとなる。しかし、表1の③に示したように、目標スコアが800点の場合でも、「問185～190までをゴールに」（星名，2023）との記述があるように、英語習熟度がそれなりに高い受験者でもパート7の最終問題となる問200まですべての問題に目を通すことは難しいことが示唆されている。

平均的な大学生であれば、解答できない問題数が相当数になることが予想される。そのため、どのパートでどのくらいの数の問題に解答するか、どのような文書や設問に対して解答すべきかなどを、各自の読解速度や問題処理速度なども勘案した上であらかじめ考えておくことが正答数を増加させるために必要だと思われる。

1-3-2. 不十分な読解速度

パート7での読解速度についてだが、TOEIC® L&R テストを作成しているETSによれば、パート7の文書を1分あたり150単語程度で読めると余裕を持った解答時間が取れるとのことである（2022b, p.12）。しかし、この150 words per minute（以下wpm）という速度は、TOEIC® L&R テストリスニングセクションの音声読み上げ速度とほぼ同じ速度であるが、意識的な訓練を行うことなしに英語習熟度が高くない大学生が到達するのは難しい数値である。三木（2016, p.88）による駒澤大学の学生を被験者とした多読授業に関する研究では、「英語多読多聴 a/b」という選択科目を履修した学生の読解速度が117.3wpmから139.3wpmへ上昇したことが報告されているが、150wpmには届いていない。また、千葉（2017, p.63）も多読学習の言語処理に与える影響についての調査で被験者の読解速度に触れているが、50万語以上を読んだ読者の数値として153.87wpmと記述している。多読プログラムで50万語以上を読むということは一般の大学生はなかなか経験できないことであるし、英語習熟度の高くない大学生にとっては多読プログラムに参加すること自体関心の対象外であろうから、多くの大学生が読解速度を150wpmまで高めることは容易でないと考えられる。

1-4. 調査の目的

本研究の目的は、TOEIC® L&R テストのリーディングセクションを制限時間内に解き終えることが難しい受験者が、問題番号順での解答ではなく、パート7（Questions 147-200）に登場する設問文の難易度を考慮して易しめの問題から解答した場合、正答数は増加するのか、また増加するとしたら正答数はどれくらい上昇するのかを推定することである。

2. 方法

本調査は、後述する2名の大学生を被験者として行う。「TOEIC® 定期試験既出問題集 1000 Vol.3 Reading」に収録されているテスト1のリーディングセクションに問題番号順で解答をしてもらい、その正答数を、易しめの問題から解答していたらという仮定の下で算出した正答数と比較する方法で行う。

これに先駆けてETS(2022b)が発行する「公式TOEIC® Listening & Reading Part 7 速読演習」を材料に両被験者の読解速度の測定も行ったことを記しておく。この測定を行った理由は、制限時間内でTOEIC® L&R テストに解答できる問題数は、読解速度にも大きな影響を受けると思われるからである。

ここで、本調査において、問題番号順に解答してもらう方法と易しめの問題から解答してもらう方法とで2回テストを実施しての正答数比較を行わなかった理由について簡単に触れておく。TOEIC® L&R テストのパート7は、単一文書問題と複数文書問題が出題されるが、単一文書問題でも、1つの文書に対し2～4個の設問文がある。これらの問題は易しめの設問文のみで構成される場合、難しめの設問文のみで構成される場合もあるが、両タイプの設問文が混在して出題される場合が多い。複数文書問題も、2文書または3文書に対して5個の設問文があり、設問文の組み合わせは単一文書問題と同様に3種類となっている。上記のような両タイプの設問文が含まれる大問を難易度ごとに分離して配列をし直し、易しめの設問文から解答してもらうテストを作成しても、全体の難易度等も変わらない平行テストにはならない可能性がある考え、2回テストという方法は取らなかった。

2-1. 被験者

被験者は2名とも関東地方の私立大学に在籍する社会科学系の分野を専攻する学生である。両被験者ともTOEIC® L&R テストの受験歴はない。しかし、被験者①は2022年度にIIBCが発行する「公式TOEIC L&R テスト問題集7」を使用した学習経験を持っている。そのため、TOEIC® L&R テストの問題形式と出題傾向について大まかな把握はできていると判断できる。当該問題集は自宅学習で使用したため、参考スコアレンジの予測等は困難である。一方、被験者②は、今回のデータ収集以前からTOEIC® L&R テストという名称を聞いたことはあったものの、問題構成や出題傾向についての知識は皆無であった。今回の調査は英語技能で分類するとリーディングに関するもののだが、両被験者の英語習熟度を知る補助的情報として以下を記しておく。両被験者とも筆者による英検2級2次試験の模擬面接を指導の過程で経験している。被験者①は英検2級の合格水準は余裕を持って超えており、被験者②も英検2級の合格水準に到達はできていた。

2-2. データ収集の方法

筆者が指導する大学生2名を被験者として、韓国で発行されている「TOEIC® 定期試験

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

既出問題集 1000 Vol.3 Reading」のテスト1のリーディングセクションパート5～7を制限時間の75分で解答してもらいデータを収集する。

公開テストやIPテスト受験の際には、75分間の時間配分は受験者に委ねられているが、今回のデータ収集に際し、3つの条件の下で解答をしてもらう。1つ目は、パート5から問題番号順に解答をするという条件である。2つ目は、パート5の30問を解き終えた時の時刻とパート6の解答を終えた時の時刻をそれぞれ問題用紙にメモするという条件である。この指示を与える理由は、パート5とパート6に当てる時間と、パート7解答時の1問あたりの所要時間を確認するためである。3つ目は、試験終了時刻が近づき制限時間内にすべての問題に解答できないと判断しても、解答できず残ってしまいそうな問題に対する答えを当て推量でマークしないことという条件である。この3つが、実際の受験時とは異なる条件設定となる。

ここで、本調査で収集予定のデータを箇条書きにして記述しておく。

- [01] パート5の解答に要した時間
 - [02] パート5の正解数
 - [03] パート6の解答に要した時間
 - [04] パート6の正解数
 - [05] パート7の解答に要した時間
 - [06] パート7で解答した数
 - [07] パート7で解答せず残した問題数
 - [08] パート7の正解数
 - [09] パート5～7での正解数の小計
 - [10] パート7の解答の際、1問あたりの解答に要した時間
 - [11] パート7「難しめの設問文(*1)と分類した問題」で解答した数
 - [12] パート7「易しめの設問文(*2)と分類した問題」で解答した数
 - [13] パート7「難しめの設問文(*1)と分類した問題」での正答数
 - [14] パート7「易しめの設問文(*2)と分類した問題」での正答数
 - [15] [13]÷[11]で算出した、パート7「難しめの設問文(*1)と分類した問題」の正答率
 - [16] [14]÷[12]で算出した、パート7「易しめの設問文(*2)と分類した問題」での正答率
- (*1)と(*2)とはどのような設問文であるかについて、次の段落の冒頭部分にて説明をしているためその部分を参照願いたい。

2-3. 設問文の仕分け

小石 (2017, p.19) と中村・山科 (2021, p.99) を参考として、「TOEIC® 定期試験既出問題集 1000 Vol.3 Reading」テスト1パート7の54問の設問文を、解答に要する時間が長くなることが予想される難しめの設問文と、解答に要する時間が多くかからないことが予想される易しめの設問文に分類する。これ以降は、前者を「難しめの設問文」、後者を「易しめの設問文」と表わすこととする。なお、本調査において、「難しめの設問文」という

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査
語句は以下の3種類を指すこととする。

- ① 設問文中に NOT という単語が含まれている設問文
- ② 文を文書中の適切な場所に挿入する問題の設問文
- ③ 文書で示されている内容と一致した内容を選ぶ問題の設問文

上記①は「NOT問題」と表記されることが多いため、本調査でもこの名称を使うこととする。上記②は“In which of the positions marked [1], [2], [3], and [4] does the following sentence best belong?”という表現が常に使われる設問文となる。この問題も「文挿入問題」と表記されることが多いため、本調査でもこの名称を使うこととする。そして上記③は内容一致問題で、前田(2012)が使用している言葉を利用して「選択肢照合問題」という名称を使うこととする。③の設問文であるが“What is true about X?”という設問文になっている場合と、述語動詞に infer, imply, suggest 等文脈を利用した推測が求められる問題となっている場合、さらに indicate, mention, state 等が使われている場合のほぼすべてがこの範疇にあてはまる。これらの動詞は、設問文中に能動態と受動態の両方の形で出現するというのも特徴的である。ほぼすべてと書いたのは、suggest が述語動詞として使用された設問文であっても、同じ文中に動名詞が目的語として続くような場合や選択肢に動名詞が並んでいるような場合は「選択肢照合問題」ではなく、選択肢がなくても答えが1つに決まる詳細情報を問う問題の設問文となるからである。

その他にも、文書の目的・趣旨を問う問題の設問文、詳細情報を問う問題の設問文、文書中に登場する語彙の同義語を選ぶ問題の設問文等があるが、小石(2017, p.9)によるとこれらは相対的に短時間で解答することが可能な問題に関する設問文となるため、本調査では「易しめの設問文」として分類して調査を行うこととする。

上記以外にも頻出する設問文として、チャットの「意図問題」に登場する設問文がある。通常、設問文は“At(時刻), what does (人) most likely mean when s/he writes, “…”?”という形となっている。中村・山科(2021, p.99)によると、「意図問題」の難易度にはばらつきが見られるとのことなので、本調査では上記2種類の分類に含まないこととする。

2-4. データに基づく表の作成

調査対象としたテストにおける被験者の解答が、「難しめの設問文」と分類した問題と「易しめの設問文」と分類した問題でどのように正解と不正解という結果に分かれたのか、またどの問題に解答した時点で試験時間が終了したのかなどが一覧できる表を作成する。今回の調査では、問題の難易度に影響を与えることが想定される文書タイプや文書数といった他の要素に焦点を当てることはしないが、補助的な情報としてこの表の中には示すこととする。さらに、完答までの残り問題数と、「易しめの設問文」と分類した問題の残りの数についても補助的な情報として表の中に示すこととする。

3. 結果

3-1. 被験者の読解速度測定結果

最初に2名の大学生の読解速度を2種類の言語材料で測定した結果について記述する。TOEIC® L&R テストですべての問題に解答できない原因には読解速度も大きく関わると思われるため測定を行った。1つ目の材料は金谷（2017）が調査に使用した中学校3年生用の検定教科書に掲載された文章で、2つ目の材料はETS（2022b）が発行する「公式TOEIC® Listening & Reading Part 7 速読演習」である。前者の材料を使用しての読解速度測定は、後者を使った測定をする前に自分にとっての読みやすい速さを体感してもらう目的で行った。いわばウォームアップである。後者の材料でのwpm測定は、内容的にも語彙レベル的にもTOEIC® L&R テストの問題に近い文書での読解速度測定となるため、大学生がTOEIC® L&R テストを実際に受験している際のwpmがどの程度かを把握するための有益な情報となると思われる。

以下に「公式TOEIC® Listening & Reading Part 7 速読演習」を使用して2名の被験者の読解速度を測定した結果をまとめた表2を示す。

(表2) ETS「Part 7 速読演習」での目標wpmと被験者2名のwpm

ページ	ETS Part 7 速読演習			—		被験者①		被験者②	
	語数	目標(秒)	目標wpm	文書タイプ	文書数	所要時間(秒)	wpm	所要時間(秒)	wpm
35	65	26	150	advertisement	1	48	81.3	36	108.3
43	105	45	140	invitation	1	63	100	55	114.6
55	108	46	140.9	notice	1	90	72	60	108
63	170	73	139.7	announcement	1	120	85	95	107.4
75	157	69	136.5	e-mail	1	125	75.4	92	102.4
83	183	79	139	letter	1	127	86.5	101	108.7
95	134	59	136.3	e-mail	1	102	78.8	66	121.8
103	146	65	134.8	e-mail	1	100	87.6	93	94.2
115	144	64	135	memo	1	105	82.3	87	99.3
123	166	69	144.3	memo	1	134	74.3	86	115.8
135	143	67	128.1	text-message chain	1	67	128.1	69	124.4
143	195	84	139.3	online chat discussion	1	127	92.1	98	119.4
155	155	64	145.3	article	1	125	74.4	78	119.2
163	228	95	144	article	1	150	91.2	129	106.1
174-175	275	118	139.8	advertisement / e-mail	2	170	97.1	145	113.8
186-187	323	154	125.8	web page / form	2	210	92.3	163	118.9
200-201	434	197	132.2	web page / e-mail / invoice	3	310	84	262	99.4
212-213	391	177	132.5	e-mail / policy / survey	3	305	76.9	243	96.5
合計	3522語	1551秒	—	—	—	2478秒	—	1958秒	—
平均	146.8語	—	137.9wpm	—	—	—	86.6wpm	—	109.9wpm
秒→分秒	—	25分51秒	—	—	—	41分18秒	—	32分38秒	—

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

読解速度の測定結果であるが、予想に違わず2名とも、この本でさしあたって目指すスピードとされている150wpmには届かなかった。全24文書における平均wpmは、被験者①が86.6wpm、被験者②が109.9wpmという結果であった。これらの数値は、被験者がTOEIC® L&R テストを受験した場合、リーディングセクションで相当数の問題を解けないまま制限時間が終了してしまうだろうということを示唆している。

文書ごとの読解速度を見ると、2名の被験者とも文書によって異なる速さで読んだことがわかる。被験者①がもっとも速く読んだ文書の読解速度は128.1wpm、もっとも遅く読んだ文書の読解速度は72.0wpmで、その差を計算すると56.1wpmである。また、被験者②がもっとも速く読んだ文書の読解速度は124.4wpmで、もっとも遅く読んだ文書の読解速度は94.2wpmであり、その差は30.2wpmあった。被験者のwpmの最大値は2名とも120台であったので、すべての文書タイプをこの速度で読んだと仮定しても、すべての問題に目を通すことは不可能であろうことがわかる結果であった。

3-2. 被験者が問題番号順に解答した際の結果

「TOEIC® 定期試験既出問題集 1000 Vol.3 Reading」テスト1を利用して収集したデータをここから示していく。

まず、被験者がどれくらいの時間をリーディングセクションパート5の単文空所補充問題とパート6の長文空所補充問題に使っていたかについて記述する。被験者①はパート5に16分間、パート6に20分間を使っていた。また、被験者②はパート5に19分15秒、パート6に13分05秒を使っていた。これら2つのパートの解答に要した時間の小計は、被験者①が36分間で、被験者②が32分20秒という結果であった。

この小計値をリーディングセクションの解答時間である75分から差し引き、このセクションの最終パートであるパート7の解答に当てた時間を算出する。被験者①は39分間を、被験者②は42分40秒をパート7の解答のために使ったということになる。

被験者が解答した問題数と解答率であるが、表3にまとめたのでこれを使って報告する。

(表3) 被験者が解答した問題数と解答率

解答した問題数 (全100問中)	被験者①		被験者②	
	解答した問題数	解答率	解答した問題数	解答率
パート5	30/30問中	100.00%	30/30問中	100.00%
パート6	16/16問中	100.00%	16/16問中	100.00%
パート7	32/54問中	59.26%	25/54問中	46.30%

両被験者とも30問で構成されるパート5と、16問で構成されるパート6の全問題には解答していた。この2つのパートにおける解答率は100%である。一方パート7では、被験者①が54問中で32問に解答し、解答率は59.26%であった。また、被験者②も54問中25問のみに解答し、解答率は46.30%と言う結果であった。制限時間内に解答できなかった問題数は、被験者①が22問(問題番号179～200)、被験者②が29問(問題番号172

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査～200)である。
次に正答数と正答率について触れていくが、これも表4にまとめたのでこれを使ってパート順に報告していく。

(表4) 被験者が解答した問題での正答数と正答率

正答率 (解答した問題数を分母として)	被験者①		被験者②	
	正答数	正答率	正答数	正答率
パート5	21/30 問中	70.00%	13/30 問中	43.30%
パート6	14/16 問中	87.50%	10/16 問中	62.50%
パート7	25/32 問中	78.13%	10/25 問中	40.00%

パート5での正答率は被験者①が70.00%という数値を示し、被験者②のそれは43.30%であった。パート6の正答率は被験者①が87.50%であり、被験者②は62.50%であった。そして、パート7の正答率は被験者①が78.13%であり、被験者②は40.00%であった。すべてのパートにおいて被験者①の正答率が被験者②のそれを上回る結果となった。2名の被験者の正答率の差が最も大きかったのはパート7で、38.13%差となっていた。
次に、パート7の設問文の難易度について表5を使って簡単に報告する。

(表5) 難易度により仕分けしたパート7の設問文の数と割合

パート7	難しめの設問文を含む問題	易しめの設問文を含む問題	その他 (意図問題)
54 問中	21 問 (38.9%)	31 問 (57.4%)	2 問 (3.7%)

すでに述べたようにパート7には54問の設問文が登場する。前述した基準で分類した結果、「難しめの設問文」が21問、「易しめの設問文」が31問、そして「意図問題」が2問という内訳になった。比率で表わすと「難しめの設問文」が38.9%、「易しめの設問文」が57.4%、「意図問題」が3.7%である。

ここからは、被験者のパート7での正答率について設問文の難易度と合わせて記述する。被験者①は全54問中32問に解答したが、この32問中、「難しめの設問文」と分類した問題は13問、「易しめの設問文」と分類した問題は17問、その他「意図問題」の2問に解答していたことになる。解答した問題32問での正答数は25問であった。内訳は「難しめの設問文」と分類した問題での正答数が8問で正答率61.5%、「易しめの設問文」と分類した問題での正答数が15問で正答率88.2%、「意図問題」での正答数が2問で正答率100%であった。一方、被験者②は全54問中25問に解答したが、この25問中、「難しめの設問文」と分類した問題は9問、「易しめの設問文」と分類した問題は15問、その他「意図問題」の1問に解答していたことになる。解答した問題25問での正答数は10問であった。内訳は「難しめの設問文」と分類した問題での正答数が3問で正答率30%、「易しめの設問文」と分類した問題での正答数が6問で正答率40.0%、「意図問題」での正答数が1問で正答率100%であった。これらについても表6としてまとめておく。

(表6) 3種類に仕分けした設問文を含む問題数とそれぞれにおける正答数と正答率

パート7	被験者①	被験者②
被験者が解答した問題の「難しめの設問文」を含む問題	13/32 問中 (40.6%)	9/25 問中 (36.0%)
被験者が解答した問題の「易しめの設問文」を含む問題	17/32 問中 (53.1%)	15/25 問中 (60.0%)
被験者が解答した意図問題	2/32 問中 (6.3%)	1/25 問中 (4.0%)
「難しめの設問文」を含む問題での正答数	8/13 問中 (61.5%)	3/9 問中 (33.3%)
「易しめの設問文」を含む問題での正答数	15/17 問中 (88.2%)	6/15 問中 (40.0%)
意図問題での正答数	2/2 問中 (100.0%)	1/1 問中 (100.0%)

さらに、被験者がパート7のどの問題で正解したかとの問題以降解答をしなかったなどが視覚的にも確認しやすくなることを目的とした表7を示す。この表には上記情報の他に、それぞれの問題に解答する際に読む文書の数、文書のタイプ、最終問題までの残り問題数、最終問題までに残っている「易しめの設問文」が含まれた問題数も含めた。

リーディングセクションの問題を解いてもらう前に、被験者には問題番号順に解くことと、終了時間が近づいても当て推量で解答をしないよう指示をしておいた。被験者①は179番から200番までの22問が未解答となり、被験者②も172番から200番までの29問が未解答となった。パート5とパート6では2名とも全問に解答をしていた一方、未解答部分がパート7後半に集中しているのはその指示のためである。TOEIC® L&Rテストは誤答に対しての減点がない試験であるため、試験時間の終了時刻が近くなると多くの受験者は未解答部分を適当にマークすることが多い。今回の被験者はこの当て推量での解答をしていないため、もし筆者の指示がなければ多くの受験者と同様に未解答を避けるべく当て推量で解答をするであろう。そこで、パート7が4つの選択肢から1つを選ぶ多肢選択問題のため、被験者が未解答だった問題については1/4の確率で正解していただろうとみなす。ここで推計される被験者2名の当て推量による正答数は、被験者①は未解答が22問だったので「 $22 \div 4 = 5.5$ 問」、被験者②は未解答が29問だったので「 $29 \div 4 = 7.25$ 問」となる。

上記で算出した当て推量による正答数を、被験者たちが実際に解答した部分での正答数と合計し、試験時間終了間際の当て推量による解答はしないよという第3の条件がなければ正解していただろう問題数を、計算上推定された正答数と表わしていく。この前提に基づく被験者のパート7における計算上推定された正答数は、被験者①が $25 + 5.5 = 30.5$ 問、被験者②が $10 + 7.25 = 17.25$ 問となる。これにともない、被験者のリーディングセクション全体での計算上推定された正答数も、被験者①が $60 + 5.5 = 65.5$ 問、被験者②が $33 + 7.25 = 40.25$ 問となる。この正答数を今回のデータ収集で使用した既出問題集の16ページにある換算表に当てはめると、計算上ではあるが、リーディングセクションにおける被験者①の予想スコアは255～340点の範囲に、被験者②の予想スコアは115～180点の範囲に収まることが示された。なお、この換算表は整数での表示となっているため、今回は計算上推定された正答数の小数点以下は切り捨てて換算したことをここで記しておく。

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

(表7) パート7における被験者の解答結果・文書数ならびに文書タイプ・完答までの問題数

問題番号	被験者①	被験者②	文書数	文書タイプ	文書タイプ	文書タイプ	完答までの問題数	完答までの「易しめの設問文」を含む問題の数
147	○	×	1	Web page	—	—	54	31
148	○	○					53	30
149	○	○	1	job advertisement	—	—	52	29
150	○	○					51	28
151	×	×	1	report	—	—	50	28
152	○	○					49	28
153	○	×	1	e-mail	—	—	48	27
154	○	○					47	27
155	×	○					46	26
156	○	×					45	25
157	○	×	1	article	—	—	44	24
158	○	×					43	24
159	○	○	1	text-message chain	—	—	42	24
160	○	×					41	23
161	○	○	1	e-mail	—	—	40	22
162	○	×					39	22
163	×	×					38	22
164	○	×					37	22
165	○	×					36	21
166	○	○	1	information	—	—	35	21
167	○	×					34	20
168	○	×	1	letter	—	—	33	19
169	○	×					32	18
170	×	○					31	17
171	○	×					30	16
172	○	未解答					1	online chat discussion
173	○	未解答	28	16				
174	×	未解答	27	16				
175	○	未解答	26	16				
176	○	未解答	25	15				
177	×	未解答	2	article	letter	—	24	15
178	×	未解答					23	14
179	未解答	未解答					22	14
180	未解答	未解答					21	14
181	未解答	未解答					20	14
182	未解答	未解答	2	Web page	review	—	19	13
183	未解答	未解答					18	12
184	未解答	未解答					17	11
185	未解答	未解答					16	11
186	未解答	未解答					15	10
187	未解答	未解答	3	e-mail	email	notice	14	9
188	未解答	未解答					13	9
189	未解答	未解答					12	8
190	未解答	未解答					11	7
191	未解答	未解答	3	article	e-mail	plan	10	6
192	未解答	未解答					9	5
193	未解答	未解答					8	4
194	未解答	未解答					7	4
195	未解答	未解答					6	3
196	未解答	未解答	3	e-mail	e-mail	price list	5	2
197	未解答	未解答					4	2
198	未解答	未解答					3	1
199	未解答	未解答					2	0
200	未解答	未解答	1	0				

*濃い網掛けをした部分は「難しめの設問文」を含む問題 (21 問)

*薄い網掛けをした部分は意図問題 (2 問)

*網掛けをしていない部分は「易しめの設問文」を含む問題 (31 問)

3-3. 「易しめの設問文」と分類した問題から解答を行った場合という仮定に基づく計算

ここからは、被験者が「易しめの設問文」と分類した問題から解答をしていたらという仮定に基づく計算を行って、問題番号順の解答をした場合と比較して、スコアの上昇につながりうるかについての結果を報告していく。

問題番号順に解答した際の正答率は、被験者のデータ収集時に求めた数値のまま変更せず計算を行う。言い換えれば、正答率に関しては、もし2名の被験者が、パート7後半の未解答部分で解答をしていたら正答数の増加につながったろう当て推量による正答数を含まないということである。また、解答する問題数についても、「易しめの設問文」と分類した問題を優先的に解答した場合、1問ごと解答にかかる時間は減少する可能性も想定できるが、この調査では解答する問題数には増減が生じないという前提で計算を行うこととする。

今回のテストのパート7には54問中31問の「易しめの設問文」と分類した問題が出題されていた。被験者①がこれらの31問を優先的に解答し、残った「易しめの設問文」と分類した問題1問と「難しめの設問文」と分類した問題21問と「意図問題」の2問に当て推量で解答したと仮定して、「易しめの設問文」と分類した問題から解答した場合の正答数を算出する。その際、先に求めた「易しめの設問文」と分類した問題に対する正答率の88.2%という数値と、「難しめの設問文」と分類した問題に対する正答率の61.5%を問題数に乗じて計算する。計算式と算出した数値は以下のようになる。

$$31 \times 0.88 + (54 - 31) \times 0.25 = 33.0 \text{ 問}$$

先に求めたパート7での「計算上推定された正答数」が30.5問のため、問題番号順で解答する方法と「易しめの設問文」と分類した問題を優先的に解答する方法で被験者①が後者の解答方法を選択した場合、約2.5問（33.0問－30.5問）正答数が増えることが示唆される計算結果となった。

次に被験者②について記述していく。前述した31という「易しめの設問文」と分類した問題の数は、被験者②がこのパートで解答した問題数の25を超えている。被験者②が「易しめの設問文」と分類した問題25問を優先的に解答し、残った「易しめの設問文」と分類した問題6問、「難しめの設問文」と分類した問題21問、意図問題2問に当て推量で解答した場合の正答数を計算する。その際、先に求めた被験者②の「易しめの設問文」と分類した問題に対する正答率の40.0%という数値と、「難しめの設問文」と分類した問題に対する正答率の33.3%を問題数に乗じて計算する。計算式と算出した数値は以下のようになる。

$$25 \times 0.40 + (54 - 25) \times 0.25 = 17.25 \text{ 問}$$

先に求めたパート7での「計算上推定された正答数」が17.25問のため、問題番号順で解答する方法と「易しめの設問文」と分類した問題を優先的に解答する方法で被験者②が後者を選択した場合でも正答数に変化が生じない（17.25問－17.25問）ことが示唆される計算結果となった。

上記の計算から、問題番号順に解答した際の正答数に当て推量での解答があったと仮定して算出した正答数と、「易しめの設問文」と分類した問題から優先的に解答した場合の

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査
 推定正答数の差は、両被験者ともに0～2.5問という結果となった。
 本調査で収集したデータと算出した推計値の一部を含む表をまとめ、表8として以下に示しておく。

(表8) 収集したデータ並びに算出した正答率等

	「TOEIC® 定期試験既出問題集 1000 Vol.3 Reading」 テスト1より	備考	被験者①	被験者②
[01]	パート5にかかった時間	—	16分00秒	19分15秒
[02]	パート5の正答数	—	21問/30問中	13問/30問中
[03]	パート6にかかった時間	—	20分00秒	13分05秒
[04]	パート6の正答数	—	14問/16問中	10問/16問中
[05]	パート7にかかった時間	—	39分00秒	42分40秒
[06]	パート7で解答せず残した問題数	—	22問	29問
[07]	パート7で解答した数	—	32問	25問
[08]	パート7の正答数	—	25問	10問
[09]	パート5～7での正答数	—	60問	33問
[10]	パート7にかかった時間の1問あたりにかけた時間	[05]÷[07]で算出した数値	約73秒	約102秒
[11]	パート7難しめの設問文で解答した数	—	13問	9問
[12]	パート7易しめの設問文で解答した数	—	17問	15問
[13]	パート7意図問題で解答した数	—	2問	1問
[14]	パート7難しめの設問文での正答数	—	8問	3問
[15]	パート7易しめの設問文での正答数	—	15問	6問
[16]	パート7意図問題での正答数	—	2問	1問
[17]	解答したパート7難しめの設問文での正答率	[14]÷[11]で算出した数値	約61.5%	約33.3%
[18]	解答したパート7易しめの設問文での正答率	[15]÷[12]で算出した数値	約88.2%	40.00%
[19]	解答したパート7意図問題での正答率	[16]÷[13]で算出した数値	100%	100%
[20]	未解答問題に25%の確率で正答したと 仮定した場合の上昇するであろう問題数	[06]×0.25で算出した数値	5.5問→ 切り捨てて5問	7.25問→ 切り捨てて7問
[21]	未解答問題に当て推量で解答していたと 仮定した場合のリーディングセクションでの得点	[09]+[20]で算出した数値	65問	37問

4. 考察

本調査の主たる目的は、問題番号順に解答する方法と「易しめの設問文」と分類した問題を優先的に解答する方法のうち、後者の方法での解答をした場合に正答できる問題数が増加するかどうかと、もし増加するようであれば、どの程度正答数が増加するかを調べることであった。結果の部分で記したように、今回の調査において被験者2名の正答数は、「易しめの設問文」と分類した問題から解答をする場合の方が、問題番号順に解答するよりも0～2.5問増加するであろうことが計算上示された。

実際にデータを収集し、そのデータに基づいた計算を行う以前は、「易しめの設問文」と分類した問題から先に解答する方法で正答数は今回得られた数値よりも増加するのではないかと予想していた。こう考えていた理由であるが、筆者がこれまでに複数回行ってき

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

た誤答分析などを通して、テスト問題の項目難易度は問題番号順に上がるとは限らず同じパートの中でも前半に項目難易度が高い問題が出現したり、後半に項目難易度の低い問題が出現したりすることが頻繁に観察されていたことに関係している。

問題番号順での解答を行うことは、テスト全体における前半部分においても、各パートにおける前半部分においてもおそらく遭遇するだろう難しめの問題に、相対的に多くの時間と労力を割いて解答をすることを意味している。その結果、正答率も下がることが予想される。

では、今回の被験者たちは、何回くらい今書いたような状況に遭遇したのだろうか。試算して推察してみる。被験者①はこのパートで32問に解答し、その中には「難しめの設問文」と分類した問題に分類された問題が13問含まれていた。それゆえ、13回解答に時間を多く割かねばならない状況に遭遇したと解釈することができる。それでも結果的にはこのタイプの問題にも8問正解して、正答率は約61.5%と低くはなかった。被験者①は「易しめの設問文」と分類した問題での正答率も約88.2%と高く、「易しめの設問文」と分類した問題から優先的に解かなくても、両タイプの問題でそれなりに高い正答数となっていた。このように、両タイプでの正答率の差が約27.3%にとどまったことも、「難しめの設問文」と分類した問題との遭遇回数が13回あったにもかかわらず、2つの解答方法における正答数の差が大きくなり2.5問程度の正答数の増加という結果になった原因であると思われる。

被験者②についても考察してみる。被験者②はこのパートで25問に解答し、その中には「難しめの設問文」と分類した問題が10問含まれていた。それゆえ、10回解答に時間を多く割かねばならない状況に遭遇したと解釈することができる。被験者②が解答した「難しめの設問文」と分類した問題9問中、正解数は3問で正答率は約33.3%だった。この数値は、当て推量での正答率である25%と大きく異ならないと解釈することも不可能ではない数値である。33.3%という低めの正答率をもとに判断すると、「難しめの設問文」と分類した問題は解答の順番を後回しにしたり、解答すること自体諦めたりして、「易しめの設問文」と分類した問題から解答をする方が正答数の増加につながるのではないかとも思える。しかし、問題番号順に解答する場合と比較して、「易しめの設問文」と分類した問題から解答したとしても正答数の増加は全くみられないという計算結果が得られた。その理由は、被験者②の「易しめの設問文」と分類した問題における正答率が40.0%であり、「難しめの設問文」を含む設問文に対する正答率である約33.3%との差が約6.7%にとどまったことが大きな原因だと思われる。いうまでもないことかもしれないが、「易しめの設問文」と分類した問題での正答率が「難しめの設問文」を含む問題での正答率と差がない場合、前者に区分される問題から解答しても正答数に変化が生じないからである。

また、今回の被験者①はリーディングセクションでの「計算上推定された正答数」が65となっており、このセクションのスコアとしては255点～340点くらいになることが換算表により示されているため、IPテストを受験する平均的な大学生の平均スコアより46点～131点高いスコアを取得する英語力があると思われる。この被験者のように正答数が高めの受験者の場合、「易しめの設問文」と分類した問題にはもちろん、「難しめの設

問文」と分類した問題にもそれなりに正解するだろうことが予想できるため、前者タイプの問題から優先的に解答する方法をとったとしても大幅な正答数増加は期待できないだろう。つまり、「易しめの設問文」と分類した問題を優先的に解答することで大幅な正答数増加を見込めるのは、「難しめの設問文」と分類した問題では正答率を上げられず、かつ「易しめの設問文」と分類した問題ではそれなりに正答率があげられるような受験者ということになろう。このような区分に当てはまる大学生がどれくらいの割合で存在するのかは興味深いところである。

次に、被験者2名のリーディングセクションにおける「計算上推定された正答数」を利用して、平均的な大学生でも同じような結果になるかを推察してみる。すでに既述してあるが、本調査における計算上推定された正答数とは、被験者たちが実際に解答した部分での正答数と試験時間終了間際の当て推量による解答はしないようにという指示がなければ当て推量でマークし、25%の確率で正解していただろうと思われる問題数とを合計した数値である。被験者①が問題番号順に解答した際の正答数60に、未解答だった22問に当て推量で正解できたであろう5.5を加えた場合、素点ベースで65.5点となる（小数点以下を切り捨てると65点となる）。「TOEIC® 定期試験既出問題集 1000 Vol.3 Reading」のスコア換算表でこの素点を見るとこのセクションの換算スコアは255～340点となっている。一方、被験者②の正答数33に、未解答だった29問に当て推量で正解できたであろう7.25ポイントを加えると40.25点となる（小数点以下を切り捨てると40点となる）。換算表でこの素点を見ると、115～180点となっている。

被験者①の換算スコア255～340点とは、リーディングセクションにおける大学生の平均スコアである209点を上回っている。また、被験者②のこのセクションの換算スコア115～180点は、大学生の平均スコアである209点を下回っている。調査の背景の部分でも引用したが、リーディングセクション得点が200～300点の場合、20～30問程度が制限時間内に解き終わらないことが多いという加藤（2019）の記述に今回の被験者2名のデータは当てはまっており、それぞれ22問と29問が未解答となっていた。それゆえ、今回の被験者2名のスコアの間に平均点がある平均的な大学生も同じような数の問題に制限時間内で解答できない可能性が高いと推察できる。平均的な大学生の「難しめの設問文」と分類した問題と「易しめの設問文」と分類した問題に対する正答率が大きく離れた数値となるのか否かは予想できないものの、仮に今回の被験者たちに近い数値となるならば、「易しめの設問文」と分類した問題からの解答方法は正答数の大幅な上昇にはつながらないと考えられる。

今回、「易しめの設問文」と分類した問題を優先的に解答する方法が問題番号順の解答方法より正答数の増加をもたらすであろうという前提で調査を行った。しかし、問題番号順での解答方法より「易しめの設問文」と分類した問題を優先的に解く解答方法にも短所がある。1つは54問ある設問文の難易度を大まかにでも把握するため、あらかじめ問題冊子をめくって最後の問題まで目を通さねばならないことである。この作業を丁寧に行えば、それだけ多くの時間を割かねばならず、むしろ未解答のままに終わってしまう問題数が増えてしまう可能性もある。読解速度が遅い受験者であれば、より一層多くの時間を要

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

してしまうかもしれない。そのため、正答数の増加が0～2.5問程度と少ないのであれば、この仕訳作業のため何分か費やすことはむしろマイナスとなるかもしれないことは頭の隅に入れておく必要がある。また、パート7の問題が1つの文書に対して複数の設問があることも、「易しめの設問文」と分類した問題から解くことの利点を打ち消してしまう可能性がある。パート7の単一文書問題では、1文書に対して2～4問の問題が出題されるが、「易しめの設問文」と分類した問題と「難しめの設問文」と分類した問題の両方が混在していることも少なくない。このような問題では、「易しめの設問文」と分類した問題のみに解答し「難しめの設問文」と分類した問題の解答をあきらめるべきなのだろうか。1文書に両タイプの問題が含まれる場合は、「易しめの設問文」と分類した問題に解答するため文書の読解をしたのであれば、「難しめの設問文」と分類した問題に対しても時間を割いて解答する方がむしろ正答数の増加につながる可能性も否定できない。こうしたことを考慮すると、今回比較してきた2つの解答方法のいずれが優れているのかを判断するには、パート7の文書タイプや選択肢に含まれる単語数など、その他の視点も含んだ判断が必要であるように感じる。

今回データ収集のために使用した「TOEIC® 定期試験既出問題集 1000 Vol.3 Reading」には、実際に過去に使われたテストが7個収録されているが、使用したのはテスト1のみである。テスト2～テスト7や日本で発行されている公式問題集を調査材料としても同様の計算結果になるのかを調べてみた。簡易調査のため、日本で発行されている公式問題集としては「公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 8」の1冊のみの参照にとどめた。「TOEIC® 定期試験既出問題集 1000 Vol.3 Reading」に収録されているテスト2～テスト7と「公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 8」のパート7に登場した問題を、「難しめの設問文」と分類した問題と「易しめの設問文」と分類した問題にここまでの調査基準に合わせて仕分けしてそれぞれを数えた。その結果は以下に示す表9の通りである（テスト1についても合わせて記載する）。

(表9) 各テストのパート7における「易しめの設問文」を含む問題の数と「難しめの設問文」を含む問題の数

	既出問題集 R3							公式問題集 vol. 8		平均値	最大値	最小値
	テスト1	テスト2	テスト3	テスト4	テスト5	テスト6	テスト7	テスト1	テスト2			
「易しめの設問文」を含む問題の数	33	42	33	36	36	39	37	37	31	36	42	31
「難しめの設問文」を含む問題の数	21	12	21	18	18	15	17	17	23	18	23	12

被験者2名の解答数や正答数、正答率も同じであるという仮定のもとで考察する。「TOEIC® 定期試験既出問題集 1000 Vol.3 Reading」のテスト2～テスト7においても、「公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 8」のテスト1～2においても、「易しめの設問文」と分類した問題数は、本調査の両被験者が解答した32問と25問という数値を上回っている。一方、公式問題集8のテスト2のみこのタイプの問題数が31問となっており、被

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査

験者①の解答数 32 を下回っていた。つまり、全 9 テストのうち、テスト 1 を含む 8 つのテストでは両被験者の解答数を超える「易しめの設問文」と分類した問題が出題されているため、このタイプの問題を優先的に解いても、正答数の増加は 1～2 問にとどまる計算結果となる。それゆえ、表 9 で示したように、それぞれのタイプの問題数は常に一定ではないものの、今回の調査の被験者のように、20～30 問程度が時間内に解答できず、かつ易しめの問題と難しめの問題での正答率の差が 10% 台程度の受験者にとっては、問題番号順に解答する方法でも「易しめの設問文」と分類した問題から解答する方法でも正答数に大きな変化は期待できないという調査結果となった。

今回の調査の限界についても記しておく。設問文の難易度に焦点化した調査であり、文書タイプ、語彙レベル、受験者の文書内容に関する背景知識の有無、選択肢に含まれる単語数など、問題の難易度に影響すると思われる他の変数は含んでいない。テストで頻出する文書タイプを例に挙げると、「記事」は難易度が高く、「求人広告」は難易度が低いとこのテストの対策書籍等には記述されていることが多い。しかし、今回の調査ではこうした観点を含んでおらず、こうした要素が設問文の難易度とどのように関係し正答率に影響しているかについて言及することはできない。また、被験者数も 2 名と少ないため、調査結果の一般化もできない点を記しておく。その一方で、本調査により、TOEIC® L&R テストリーディングセクションの各パートにおける時間配分、パート 7 の文書を読む際の速度 (wpm) などについて大学生の実態を紹介することができた点と、このテスト準備の書籍で推奨されることが多い「易しめの設問文」と分類した問題を優先的に解答したとしても、問題番号順に解答する方法に比べて正答数の大きな増加につながらない事例があることをその理由とともに示せた点では、受験戦略の指導者ならびにこのテストの受験準備している学習者にとって参考となる情報を提供できたのではないかと考えている。

おわりに

今回、TOEIC® L&R テストのリーディングセクションの解答方法として、問題番号順に解くのではなく、「易しめの設問文」と分類した問題から解くという解答方法を選択した場合、正答数の上昇に寄与するのではないかという予想にもとづいて調査を行った。被験者 2 名共に「易しめの設問文」と分類した問題での正答率と「難しめの設問文」と分類した問題での正答率の差が 0%～20% 台にとどまったことも 1 つの原因となり、「易しめの設問文」を分類した問題から解答しても正答数の上昇はほぼみられないという計算結果となった。正答数の差がいずれの方法でも 0～2.5 問と大きく変わらなかった理由には、「易しめの設問文」と分類した問題から解答することによる時間的余裕や、その余裕がもたらすと思われる未解答問題数の減少などを含まない調査方法の結果であることも関係していると思われる。平均的な大学生にとって難易度が高いこのテストで、読解速度が 150wpm に到達していない場合には、相当数の問題に目を通すことも難しいことが今回の被験者からも確認された。今回の調査は被験者数が 2 名のみということで限定的な調査となっているが、この調査結果を 1 つの資料として受験戦略の立案の際に使ってもらえれば

TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査
幸いある。

〔参考文献〕

- 千葉克裕. (2017). 「多読学習が英文読解速度に与える効果」『文教大学国際学部紀要』第28巻第1号, 57-65.
- 中條清美. (2003). 「英語初級者向け「TOEIC 語彙 1, 2」の選定とその効果」『日本大学生産工学部研究報告B』第36巻, 27-42.
- ETS. (2018). 『公式 TOEIC Listening & Reading 問題集 4』東京：一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会.
- ETS. (2021). 『公式 TOEIC Listening & Reading 問題集 8』東京：一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会.
- ETS. (2022a). 『TOEIC® 定期試験既出問題集 1000 Vol.3 Reading』ソウル：ホムンホ.
- ETS. (2022b). 『公式 TOEIC Listening & Reading Part 7 速読演習』東京：一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会.
- 濱崎潤之輔. (2016). 『マンガで攻略！はじめての TOEIC® テスト全パート対策』東京：西東社.
- 早川幸治・神崎正哉・TEX 加藤. (2010). 『990 点満点講師はどのように TOEIC® テストを解いているか』東京：コスモピア.
- 星名亜紀. (2023). 「リーディングの時間が足りない！を解消する 6 つの秘訣」
Retrieved from <https://gariben.me/media/toeic-reading-lacktime/> (2023 年 8 月 30 日最終閲覧)
- 金谷憲 (編著). (1995). 『英語リーディング論』東京：河源社.
- 金谷憲 (編著). (2017). 『高校生は中学英語を使いこなせるか？』東京：アルク.
- 加藤武彦. (2019). 『スコアが伸び悩む人に読んでほしい TOEIC 勉強法虎の巻』 Retrieved from <https://www.kandagaigo.ac.jp/kifl/contents/toeic-how-to-study> (2023 年 8 月 30 日最終閲覧)
- 小石裕子. (2017). 『TOEIC® L&R テスト正攻法で攻めるパート7 読解問題』東京：語研.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (2008). 『TOEIC® Program 各テストスコアと CEFR との対照表』
Retrieved from: https://www.iibc-global.org/toeic/official_data/toeic_cefr.html (2023 年 8 月 30 日最終閲覧)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (2023a). 『TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2023 (2022 年度受験者数と平均スコア)』 Retrieved from: https://www.iibc-global.org/hubfs/library/default/toeic/official_data/pdf/DAA.pdf (2023 年 8 月 30 日最終閲覧)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (2023b). 『レベル別評価の一覧表』 Retrieved from: https://21606703.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/21606703/library/default/toeic/test/lr/guide04/guide04_02/score_descriptor/pdf/Score_Descriptor_Table.pdf (2023 年 8 月 30 日最終閲覧)
- 小谷克則・吉見毅彦・井佐原均. (2011). 「読解効率に基づく英文読解能力測定テストの開発とその信頼性・妥当性の検証」『情報処理学会論文誌』第52巻, 第4号, 1843-1851.
- 前田ヒロ. (2012). 『TOEIC® テスト究極のゼミ Part 7』東京：アルク.
- 三木望. (2016). 「選択科目としての英語多読授業とその成果」『駒澤大学外国語論集』第21巻, 73-95.
- 望月正道・田中俊弘・リチャードウォーカー・伊藤綾香. (2022). 「TOEIC® リーディング得点に影響す

- TOEIC® L&R テストパート7における設問文の難易度を考慮した解答方法がスコアに与える影響に関する調査
る要因の解明』『麗澤レビュー』第28巻, 12-23.
- 中村信子・山科美智子. (2021). 『TOEIC® L&R テストリーディング解き方のスタートライン』東京：
スリーエーネットワーク.
- 白野伊津夫. (2017). 『TOEIC® L&R テスト書き込みノート全パート攻略編』東京：学研.
- 鈴木祐一. (2017). 「日本人高校生にはどれくらいの英文処理速度が必要か？—大学センター試験『英語』
の分析から—」『神奈川大学言語研究』39巻, 1-20.
- 鈴木祐一. (2017). 「どれくらい速く読めるか？」『高校生は中学英語を使いこなせるか？～基礎定着調
査で見えた高校生の英語力～』東京：アルク.
- 高梨庸雄・卯城祐司 (編). (2000). 『英語リーディング事典』東京：研究社出版.
- 田邊竜彦. (2018). 「試験前に必ず知っておくべき TOEIC 時間配分のコツ」 Retrieved from: <https://toiguru.jp/toEIC-time-management> (2023年8月30日最終閲覧)
- 谷口賢一郎. (1992). 『英語のニューリーディング』東京：大修館書店.
- Trew Grant. (2007). *A Teacher's Guide to TOEIC® Listening and Reading Test Preparing Your Students for Success*. Oxford: Oxford University Press.
- Trew Grant. (2008). *Tactics for TOEIC listening and reading test*. Oxford: Oxford University Press.
- TTT 模試作成プロジェクト (編). 『TOEIC® L&R テスト 200%活用模試』東京：アルク.

(Abstract)

The main purpose of this study was to investigate the extent to which the number of correct answers would change if test takers who had difficulty completing the reading section of the TOEIC® L&R test within the time limit chose to answer Part 7 from the least difficult question instead of the question number order. The classification according to the difficulty level of the question sentences was conducted with reference to Nakamura and Yamashina (2021, p.99). Two university students were asked to solve the questions in the reading section in numerical order that had been asked in the past, and the number of correct answers was compared with the number of correct answers calculated based on the assumption that the questions had been answered from the less difficult questions. As a result, it was found that the number of correct answers to the questions classified as “easy questions” would increase by 0~2.5 compared to the answer method in order of question number. One of the reasons for the slight increase in the number of correct answers is that the difference between the correct answer rate for low difficulty questions and the correct answer rate for tough questions was not large for both subjects. In addition, the fact that the results of the survey did not take into account the time margin caused by the priority of answering the easier questions, the improvement in the quality of the answers and the decrease in the number of unanswered questions, which would be brought about by this time margin.